《論　文》

今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義と反グローバル主義
―第二次世界大戦中の『みくに』「賀川豊彦氏の思想批判特輯號」から読み解く―
Anti-Semitism and Anti-Globalism in IMAIZUMI Genkichi's *Mikuni* – What We Find in the *Mikuni* Special Issues of KAGAWA Toyohiko during World War Ⅱ –

加藤　知子
Tomoko KATO

Abstract

The *Mikuni*, a magazine of Christianity made-in-Japan, had three special issues of KAGAWA Toyohiko in 1942, about one year after the Pearl Harbor attack. KAGAWA was a prominent, worldly well-known Christian before, during and after World War II. The *Mikuni* gradually drifted from its Christian faith and landed on the strong, military-oriented patriotism, the ideology which dominated Japan in the 1930s and the first half of the 1940s. The *Mikuni* writers criticized KAGAWA harshly, using strong words of Anti-Semitism. In this paper, the author argues that the *Mikuni* writers accused globally minded KAGAWA because they believed that the globalism was a trap carefully placed by the Jews, waging in the Japanese territory and smashing its traditions. To the *Mikuni*, World War II had to be fought not only to defend sacred Japan against the Jewish globalism but also to start a new one which would be led not by the Jews but by the Japanese. As the war ended, however, this dream of theirs also ended. In order not for the history to repeat, we must revisit and learn from the past, which should be one of the keys to open up peace to our future.

キーワード：『みくに』、賀川豊彦、反ユダヤ主義、グローバル主義、皇国

Ⅰ．はじめに

本論文は、日本的キリスト教月刊誌『みくに』（今泉源吉主筆、1935 年第 1 巻第 1 号～1943 年第 9 巻第 3 号発行）についての論考であり、日本的なるもの・日本的キリスト教・反ユダヤ主義・『みくに』・『みくに』に見られる反ユダヤ主義についての概論的な論文、加藤（2022）の続編である[1)]。日本では少数派であるキリスト教徒が、キリスト教信仰と日本人であることを両立させようと試みて、明治以降、日本的キリスト教が生まれているが、『みくに』もその一つに位置づけられる[2)]。同雑誌では、第 3 巻ごろから反ユダヤ主義が強くなったことが認められるが、本論文では、真珠湾攻撃後の、『みくに』「賀川豊彦氏の思想批判特輯號」（第 8 巻第 10～12 号、以下批判特輯號と称する）を取り上げ、そこに色濃く見られる反ユダヤ主義について考察する。『死線を超えて』で有名なキリスト教徒賀川豊彦については『賀川豊彦』全集が編まれるなど数多くの研究があり、批判特輯號について

も既に加山（2005）の論考がある[3]。しかしながら、同論文は批判特輯號を通して賀川豊彦について考察したものであるのに対し、本論文は批判特輯號を通して、『みくに』が理解していた反ユダヤ主義とは何か、なぜ賀川批判の根拠が反ユダヤ主義なのかを論ずる。加藤（前掲書）の一部でも、批判特輯號に言及したが、本論文では、批判特輯號に見られる反ユダヤ主義をクローズアップし、更に詳しく考察を進めていく。

本論文第Ⅱ章以降の構成は次のとおりである。第Ⅱ章では、近代日本のユダヤ研究第一人者の研究成果を参考に、第二次世界大戦終了時までの近代日本におけるユダヤ人論考に触れる。第Ⅲ章では、まず、『みくに』批判特輯號の概要を述べ、次に、賀川豊彦批判の根拠がなぜ反ユダヤ主義なのかを論ずる。更に、賀川がその手先であるとした勢力に、『みくに』が何をもって挑んだのか、そして、その闘いにおいて、自分たちこそ大局を見極めていると信じていたであろう『みくに』執筆者こそ、大局を見誤ったのではなかったのか考察する。最後の第Ⅳ章では、『みくに』に見られたようなユダヤの論考は 21 世紀の今でも消えてはおらず、その意味でも歴史から学ぶことの重要性を述べて、本論文結語としたい。

本論文の研究手法は文献研究であるが、入手困難な『みくに』は、名古屋市在住（2022 年現在）の大島純男牧師宅に全巻・全号が残されており、大島牧師夫妻の好意で、自宅で拝見させていただいた。また、杉浦秀典副館長はじめ賀川豊彦記念松沢資料館の皆様のおかげで、貴重な資料を閲覧することができた。更に、Abstract 英文を校正してくださったのは Juile Ichikawa 氏である。この場を借りて感謝の念を表したい。ただし、本論文の考察や見解は本論文筆者のものであり、また、文責も本論文筆者に帰する。なお、旧字体・旧仮名遣いは、『みくに』等文献からの引用の場合はそのままに、それ以外は新字体・新仮名遣いに、とした。本論文は、2022 年度星城大学経営学部研究費を受けて執筆された。

Ⅱ．日本における反ユダヤ主義の研究―宮澤正典による文献目録の作成―

日本におけるユダヤ研究者の一人で、『近代日本のユダヤ論議』『ユダヤ人論考―日本における論議の追跡』などの著書がある宮澤正典は、近代日本に見られる反ユダヤ主義を含む、ユダヤ人問題論議について丹念に調べ上げ、目録にまとめている[4]。昭和初期、日独伊三国同盟を通じてナチス・ドイツと軍事的に組んだ日本であるが、ナチス・ドイツのようなユダヤ人迫害は行っていない。しかしながら日本においても、ユダヤ人に対する反感や警戒心は、講演会・新聞記事・著作などを通じて国民の間に広がっていた。宮澤は、日本に存在したこの歴史的事実―第二次世界大戦後ほとんど触れられることはないが―が埋もれてしまわないよう尽力した稀有な研究者であると言える。

宮澤によれば、陸軍中将四王天延孝は「日本における反ユダヤの総帥であったことはまちがいない」[5]のであり、ユダヤ人支援を実行していたきよめ会のキリスト教徒らが弾圧された時も「四王天が黒幕」[6]だったという。宮澤は、『ユダヤ人論考 増補』の中に約 120 ページに亘る「付　ユダヤ人問題論議文献目録（一八七七―一九八一）」を収録しており、これは、明治期から 1981 年までの近代日本における、ユダヤ人問題に関する文献の目録である。以下、「目録」と称する。この後、宮澤は、宮澤編（1990）[7]、宮澤編（2005）[8]、宮澤（2015）[9]などで、文献目録の充実を図っている。「目録」を更に充実させ、1988 年までの文献を含めたものが、宮澤編（1990）であり、こちらは、「新目録」と称することとする。

「目録」「新目録」では、四王天延孝／藤原信孝の著作が多く見られる（四王天延孝は藤原信孝のペンネームでも執筆活動をしていた[10)]）。「目録」「新目録」の中で四王天が初めて現れるのは 1923 年であり、本名の四王天延孝で財団法人自慶会研究会から出された『労働争議と猶太問題』と、藤原信孝の名前で 1923 年に東光会から出版されている『不安定なる社会層と猶太問題』＜現実叢書第一輯＞[11)]である。続く 1924 年には、四王天延孝として偕行社から『社会主義と猶太問題』が、また、藤原信孝の名前で内外書房より『自由平等友愛と猶太問題』が出ている[12)]。同年には、包荒子が『世界革命之裏面』を二酉社内二酉名著刊行会から出版していると宮澤は記している[13)]。包荒子は陸軍大佐安江仙弘のペンネームであるが[14)]、安江仙弘は、陸軍中将樋口季一郎とともにユダヤ人救出の功労者として言及されることがほとんどであり、実際その側面のみで安江を理解している場合が多いと思われる。しかしながら、彼は、日本に反ユダヤを紹介した人物の一人でもあるのだ。

宮澤は、『四王天延孝回顧録』（1964 年、みすず書房）に言及し、その中で、全国中学校校長会の一人から、四王天のユダヤ問題についての講演録を校長会全員に配布したいという申し出があったと記している[15)]。その後、校長から教諭へ、教諭から生徒へ、そして父母へ、とユダヤについての情報が広がっていったのであろうかとも想像される。

「目録」「新目録」での『みくに』への言及は、「今泉源吉「神の国思想の危険性」『みくに』第 8 巻第 12 号（みくに社）」[16)]がある。これは批判特輯號の一部であり、同誌がユダヤ問題と絡めて賀川豊彦批判を展開していたことに宮澤も気づいていたことがわかる。

（表１）「新目録」収録のユダヤ人問題論議に関する文献数（1877 年～1945 年）

年	文献数	年	文献数	年	文献数	年	文献数
1877	2	1909	2	1922	14	1935	7
1882	1	1910	1	1923	23	1936	43
1883	1	1911	4	1924	18	1937	68
1885	3	1912	3	1925	10	1938	136
1886	1	1913	3	1926	9	1939	92
1892	1	1914	1	1927	7	1940	59
1896	2	1915	3	1928	22	1941	110
1898	2	1916	1	1929	17	1942	111
1903	2	1917	5	1930	13	1943	92
1905	2	1918	8	1931	9	1944	30
1906	3	1919	3	1932	7	1945	1
1907	1	1920	9	1933	22	***	***
1908	1	1921	14	1934	13	***	***

出所：宮澤編（1990、11‐50）から本論文筆者作成

「目録」はおよそ 120 ページであり、「新目録」の中で更に充実が図られているが、日本におけるユダヤ人問題論議―肯定的なものも否定的なものも―に関する文献を全て列挙し

ているわけではない。『みくに』にしても、反ユダヤの記事は「神の国思想の危険性」だけではないが、その他の記事は、「目録」「新目録」には見当たらない。恐らく他の雑誌や著者についても同様に抜け落ちたものがあるに違いない。すると、実際に発行された文献は「目録」「新目録」に収録されたものをはるかに上回ると推測され、ここに、日本におけるユダヤに対する関心の高さと、裾野の広さをうかがうことができるだろう。1877 年から 1945 年までの、「新目録」に掲載されている文献数を表 1 に示している[17]。「新目録」の不完全さは宮澤も認めているが[18]、日本が対米英戦に向かう時期に、ユダヤ人問題論議が高まっていたことはおおよそ確認できる。

Ⅲ. 賀川豊彦と、批判特輯號における反ユダヤ主義

（1）批判特輯號の執筆者と記事の概要

『みくに』は 1942 年第 8 巻 10 号から三号に亘り賀川思想批判特集を組んだ。

（表２）『みくに』「賀川思想批判特輯號」の筆者と記事ならびにその概要

号	ページ	著者名	記事題名	概要（　）内はページ数
第十號	1 ～12	今泉源吉	「思想戰に立つ賀川豊彦氏の反省を求む」①	1938 年の賀川との会話を想起しながら、賀川の、古事記、天皇、日本歴史、時局についての見方を、反ユダヤの視点から批判。
	13 ～ 27	今泉源吉	「賀川豊彦氏の著作を檢討する」②	賀川豊彦氏を、米英（背後にユダヤ勢力）の第五列的存在であるとして神の国運動を批判。賀川の猶太的歴史觀を批判。
	28 ～ 35	岩越元一郎	「無題」③	かつて賀川の影響でキリスト教信仰を得たことを反省しながら、反国家的非戦論的な賀川を批判している。賀川の文体に対する岩越の批判は感情的になっている。
	35 ～ 41	松野重正	「賀川豊彦氏の思想を檢討する」④	かつての賀川信奉者であった筆者松野が、皇国を忘却し、猶太民族を支援する賀川を批判。
	42	無記名	「編輯後記」⑤	賀川がエホバ中心から皇室中心へと戻るよう祈っている。
第十一號	1 ～ 13	今泉源吉	「賀川氏の『隣人愛』を衝く」⑥	賀川の説く猶太的隣人愛が国という単位を滅ぼしている、と非難。ローゼンベルグに賛同。
	14 ～21	岩越元一郎	「賀川氏の『科學』に就ての誤謬」⑦	自然科学を究めると宗教的になるという賀川の主張を批判。自然科学の探求が天皇へ帰一するわけではないという理由である。賀川への誹謗中傷的表現が多い（例：「低劣な見榮」（15））
	21 ～32	松野重正	「賀川氏の神の國運動及歴史觀を　撃碎する」⑧	日本人であることを捨て国際人となり、猶太歴史觀に重きを置いている賀川を、思想国防の視点から批判。
	33	今泉源吉	「鎌倉たより」⑨	賀川比国訪問に反対。第十號に対する『みくに』読者による共感。批判特輯號余部販売の広告。
第十二號	1	崎山稔	「大東亞緒戰」⑩	帰還した崎山稔作の短歌。
	2 ～ 12	今泉源吉	「神の國思想の危險性」⑪	民族主義から万国主義者になり、神による共産主義を説く賀川を批判。賀川著作の影響により不敬罪となった少年の紹介。日本国民は猶太神ではなく天皇のために命を捧げるべきであるとして、日本的キリスト教を批判。
	13 ～ 23	岩越元一郎	「『武と愛』の眞義」⑫	大東亜戦争を「世界の大試合」(17) と見做し、武により「アングロサクソン猶太の大蛇」(14) を切るべきだが、猶太やキリスト教の愛が武を弱めているとする。
	23 ～ 28	松野重正	「尊皇心と神の國	近世の欧州で、戦争・革命毎に少なからぬ王国

			運動」⑬	が共和国になっていることに注目し、その背後にユダヤ勢力があり、彼らが日本人の敬神・尊皇精神をも奪おうとしているとする。
	28	無記名	「鎌倉たより」⑭	真珠湾攻撃一周年にあたり正気の躍動を感じるとの感想。賀川南方行取りやめ。『先驅九十年』の紹介。

出所：『みくに』第 10 号～第 12 号より本論文筆者作成

各号の筆者と記事、概要は表２のとおりである[19]。

表２でページ数が一部重複しているのは、記事の終わりと最初が同じページの場合があるからである。参照しやすいよう記事題名の後に①②③のように通し番号をつけてある。

崎山稔を除き後は、三号とも今泉・岩越・松野三名による記事で構成されている。批判特輯號は『みくに』読者には好評であり、定期購読者以外にも余部購入の希望があったことがうかがえる。なお、宮澤は、日本におけるユダヤ人問題論議を四つの時期に区切っているが、『みくに』は、第二期（世界恐慌から第二次世界大戦終了まで）の中に位置づけられる[20]。第 8 巻第 12 号の後、第 9 巻は第 3 号で終了してしまうが、批判特輯號の時点では、終了を予想させるような言説は見当たらない。

（２）『みくに』批判特輯號が危険視したユダヤ勢力―なぜ『みくに』は反ユダヤ主義なのか

批判特輯號が発行された 1942 年は、本論文表１にまとめた「新目録」にあるように、ユダヤ人問題論議に関する文献が多く発表された。実際、表２④では四王天延孝の「ユダヤ思想と運動」に触れながら、第一次世界大戦も第二次世界大戦も背後にユダヤ民族がおり、よって、「對英米戰とは對猶太戰である」（表２④、40）としている。批判特輯號は一貫して反ユダヤ主義の視点から賀川豊彦を批判しており、『みくに』主要執筆者にとって反ユダヤ主義とは何なのか、なぜ彼らは反ユダヤ主義なのか考察するのに相応しい文献であると言える。なお、ユダヤ人迫害について詳しい黒川知文は、欧州におけるユダヤ人迫害の原因として、宗教的原因、経済的原因、民族意識の高揚、政治的原因、社会的原因の五つを挙げており[21]、これらと、『みくに』における反ユダヤ主義の原因とを比較する作業も重要であるが、それは他稿に譲り、本論文では、批判特輯號を読み込むことにより、なぜ『みくに』筆者らが反ユダヤ主義という立場から賀川を批判せずにはいられなかったのかを考察したい。

なぜ賀川批判の根拠が反ユダヤ主義なのか、その（今泉らが断定する）原因は三つにまとめられる。

一つ目は、大戦の真の敵はユダヤというものである。批判特輯號が組まれた 1942 年末は日本が対米英に宣戦布告後一年ほどのことである。表２②のように『みくに』は米英の背後にユダヤ勢力がいると考えていた[22]。米英と日本は戦闘中で、ユダヤ的歴史観を持ち反戦の立場を取る賀川は、敵側の手先として日本と敵対しているということになる。そこで、表２②では、賀川を第五列的であると非難しているのである。敵側がユダヤ勢力であるから、こちらは反ユダヤである、という構図である。

二つ目は、ユダヤ神エホバ信仰は日本人に相応しくないというものである。『みくに』が発行された昭和初期は、日本の国体、天皇と臣民の関係などについての議論が活発であっ

た時期である。天皇を人としての元首ではなく宗教的次元での存在であるとした場合、一神教であるキリスト教（母体はユダヤ教）伝道を日本で進めると、必然的に天皇かエホバか、という問いに辿り着く。両者の折り合いをどのようにつけるのか、あるいは、つけないままどちらかを選び取るかは、日本のキリスト教徒各人によるのであろうが、日本的キリスト教系雑誌として出発した『みくに』は、その後キリスト教から決別する方向に進んだ。従って、『みくに』発行最後に近い第 8 巻第 10～12 号では、当然の帰結とでも言えるように表２①、④、⑤、⑪、⑬のような、日本人であるからには天皇を選択するべきであるのにエホバ信仰を説く賀川を批判する反ユダヤ記事が掲載されているのである。

三つ目は、ユダヤ主義とはグローバル主義であり、そのユダヤ的グローバル主義に日本は対抗するべきだ、というものである[23)]。一神教の世界宗教キリスト教徒である賀川は、グローバル主義的社会の実現を思い描いていたらしい。批判特輯號では、賀川のグローバル主義を危険視する論調が幾度となく続き、そのグローバル推進の原動力がユダヤ勢力であるとするところに特徴がある。『みくに』における反ユダヤ主義とは、実は、反＜ユダヤ的グローバル主義＞でもあり、その視点から賀川を批判している、というわけである。この点について、本節で詳しく考察したい。

表２⑧では、賀川の「ヨーロッパよさよなら」[24)]の詩を引用しているが、そこには「嗚呼私は伊太利の海に告げる　海よ永遠に若かれ　そこには國境なく　所有者もなく・・・」とある（「私」とは賀川を指す。下線は本論文筆者による）。ここには、国境なき世界（すなわちグローバル主義）という賀川の理想が明確に描かれている。それに対して松野は「『國』と云ふもの『民族』と云ふものは彼に取つて神の國を成立させる邪魔者である」（表２⑧、25）と指摘し（「彼」は賀川を指す）、「賀川氏の説く様なキリスト教が發展するなら我國にとつて非常な危機と云はねばならぬ」（表２⑧、32）と警戒感を表している。グローバル化が進んで国境が消滅すれば、日本も滅ぶであろうからである。

表２⑪では、賀川が『イエスと人類愛の内容』[25)]の中で、生理的社会（血族によって結ばれた社会で、民族も生理的社会）よりも文明社会（知識・美・宗教など、心理的に自覚される個性が団結）を優先していることの例として、「血族につながるロマ帝國が、愛によって結ばれた心理國家なる教會に征服されたこと」（表２⑪、10）を挙げている。心理的自覚の個性で団結することを理想として目指せば、生理的社会の垣根が崩れても損失とはならないし、むしろ、好ましいこととなり、グローバル化にも貢献できる。今泉によれば、これが賀川の立ち位置である。しかしながら、祖国防衛を急務とする今泉にとっては民族国家の垣根が壊れては大変である。彼はそこにユダヤ勢力の影響を見て、賀川の言説が「國民思想の衰弱を來さしめる原因となる」（表２⑪、12）と非難しているのである。

表２①には、今泉と賀川との会話が含まれており、賀川は次のように語ったという。

> 十字架に死んで三日目に甦つたキリストと云ふ罪なき神の羔の生命、この一人の生命が波紋のように全世界に押しひろがり全宇宙にのびあがる姿が眞の世界歴史だ。（表２①、5）

これは、キリスト教徒であれば特段驚くこともない、『聖書』にイエス・キリストの言葉

として記されている、いわゆる大宣教命令―キリストの福音の世界伝播―のとおりの発言である。いくつかの聖句を次に記す（出所は新共同訳[26]、下線は本論文筆者による）。

だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。
『聖書』「マタイによる福音書」28:19
全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。
『聖書』「マルコによる福音書」16:15

賀川に対する今泉源吉の感想は次のとおりである（下線は本論文筆者による）。

この筆法から云ふと、皇國史は罪の歴史となつて皇紀も亦キリスト紀元に統一されてしまう必然性があると云ふのか。かう思ふと私は血が逆流するやうな公憤を感じた。賀川氏と云ふよりも非常な勢で世界に溢れてゐるユダヤ思想の日本への進撃を感じたからである。（表２①、6）

『聖書』にある大宣教命令を忠実に実行し、日本人を含むすべての民をキリスト教徒としようとするならば、当然の帰結として、日本の皇紀も排して、キリストの歴史に組み込むことになろう。批判特輯號時の『みくに』は、既にこのキリスト教（母体はユダヤ教）の志向するところのものとは決別しているから、彼らにはキリストの「生命が波紋のように全世界に押しひろがり」日本まで覆いつくしてしまうことは、福音（善き知らせ）ではなく敵の進撃と映るのである。しかも、それはユダヤ的革命思想でもあるのだと『みくに』では認識されている。今泉は表２②で次のとおりに述べている。

この神による革命の猶太思想が根深く西洋の歴史を流れて今日の米英の基礎となつてゐる。米英を撃つと云ふことは、結局に於て、この思想の誤を正すことである。
（表２②、21）、傍点は今泉によるもの）

この革命思想が津波のように世界各地を飲み込もうとしているというのが『みくに』批判特輯號の持つ危機感である。表２④では松野は、「ローマの歴史はキリスト教の信仰に屈服して了つた」（表２④、40）、「ユダヤ人が長年求めてやまぬ以上の理想國とは何を云ふのか。ユダヤ人の世界支配權を確立せること世界の國々を滅ぼし支配下に置く陰謀を指すのである」（表２④、40－41）と述べている。ユダヤ人により滅ぼされたとされる具体例として、表２⑬では、フランス、ロシア、独逸、オーストリア、ハンガリー、ポルトガル、スペインと、皇帝・国王が退位した国を挙げている[27]。批判特輯號によれば、フランス革命の背後にユダヤ勢力があり、この革命は「歐洲に於て永らく逆境にあつて差別待遇をうけてゐたユダヤ人の解放運動」（表２⑬、24）なのであるという。ユダヤ人が解放されるというのは、世襲の王政ではなく共和制になれば、ユダヤ人の社会進出が容易になるからであろうが、世襲とは血族に基づく生理的社会の礎であり、一方、共和制とは血族・民族如何にかかわらず共通の理念（フランスの場合は自由・平等・博愛）を自覚した者が形作る文明

社会である。フランス以外の国々も、次々と共和制となり、その流れが日本に到達すれば、世界に稀なる皇統も途絶えてしまう。そこで、表２⑥にあるように、批判特輯號では、第二次世界大戦を「米英の民主的隣人愛」（これは世界を包み込むユダヤ人の隣人愛）と「無窮なる皇國の榮譽」との対立であると捉え、この闘いを闘い抜こうということになっているのである（表２⑥、13)）。

このように、『みくに』批判特輯號における反ユダヤ主義とは、反＜ユダヤ的グローバル主義＞でもあるのである。ただし、批判特輯號筆者らは、彼らが警戒するユダヤ的グローバル主義に対して、単純に日本の国家主義を以て対決しようとしたのではない。『みくに』が提示した対決の構図は、＜国家主義＞対＜グローバル主義＞ではないのである。この点について次節で言及したい。

（３）対決する二つのグローバル主義：ユダヤ的グローバル主義と皇国的グローバル主義

第二次世界大戦とは、何と何が、誰と誰が、戦った大戦なのであろう。確かなのは、欧州や北米、アジアやアフリカ、南米まで巻き込んだ文字通りの世界大戦だったということである。このように大きく複雑な大戦の原因は何なのかを探る際には慎重でなければならないし、また、責任を安易に、一国、一人のみに課すことも控えるべきではないかと思われる。令和を生きる我々は、昭和初期当時の先達よりも大戦について多くの情報を得ており、なおさら慎重さと謙虚さが求められると言える。

『みくに』批判特輯號執筆者の理解していた第二次世界大戦時の日本が置かれた状況とは、おおよそ、ユダヤ勢力が背後にいるグローバル主義（米英主導）の津波に日本が抵抗する、というものであると言っていいだろう。しかしながら、ここでいう日本による抵抗とは、日本という一国―グローバル主義者から四方八方攻め込まれて籠城しているかの如くの―を守るためのものというよりは、実は、日本を主軸とした一種のグローバル主義（本論文では、皇国的グローバル主義と称する）に基づくという点を見逃してはならない。すなわち、批判特輯號が描く第二次世界大戦とは二つの異なるグローバル主義の対決なのである。批判特輯號に見られる、日本によるグローバル化、日本が世界の中心だと考えていると思われる箇所は次のとおりである（下線は本論文筆者による)。

今度の支那事變は［中略］和を内外に徹せしむるための戦である。
（表２①、5)（中略は本論文筆者による）

豊葦原とは全世界を指し、瑞穂の國とは其親國でありその中心である日本を云ふ、と大國隆正翁が言ひましたが、かう云ふ八紘一宇の大皇國こそ我々の理想ではないでせうか。（表２①、8)

國と國との分を正し各其所を得せしむる神武によつてのみ、四方の波靜まり八紘一宇の神國が歴史的現實として來るのである。（表２①、12)

昭和六年九月十八日の夜柳條溝に炸烈した砲火［中略］深夜を壓する萬歳の叫び、之ぞ世界皇化の第一聲であつた。（表２②、17)（中略は本論文筆者による）

私はあのキリスト教の洗禮と言ふのは日本のみそぎが西の方へだんだん墮落して傳はつてゆき、あの粗末な先禮の形式になつたのだと思つた。（表２③、32 -33)（「私」は、筆者岩越を指す）

アジアを日本に結ぶことによつてのみ安定を得る［後略］（表２④、37）（後略は本論文筆者による）

然らば日本國が世界の親國として、本黨に忠義なますらをの生命を、つみかさねつみかさねしてまもつて來たことは、更に偉大なる歴史の神祕ではないか。（表２⑦、21）

この時に身分の本源者にまします大元帥陛下が皇武を發揮して、この猛獣をきつて正しき位におさめ給ふ時に初めて世界に大和の秩序が恢復するのである。（表２⑫、16）[28]

批判特輯號執筆者には、日本が迫りくるグローバル勢力に対して、日本一国に籠城して抗戦するというよりは、その勢力を前に日本が中心となって対抗し、新たな世界を作るという世界観があった。だからこそ、表２⑭では、真珠湾攻撃一周年記念に際し「あゝ再び十二月八日が來た。そしてもう一度あの正氣の躍動を國内に感じている」（28）のように、肯定的に日本による対米英宣戦布告を捉えることができたのかもしれない。

しかしながらその後、その世界観は、批判特輯號執筆者がそのために命を賭してまで戦うべきだと力説していた、昭和天皇その人によって否定されることとなる。

第二次世界大戦後昭和天皇は「新年ニ當リ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス國民ハ朕ト心ヲ一ニシテ此ノ大業ヲ成就センコトヲ庶幾フ」（いわゆる「人間宣言」）を発せられた[29]。この中では、「天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ」とある（下線は本論文筆者による）。ここで意図されていることは、皇室の家系は遡ると神話の世界に辿り着くが、だからと言って、日本が世界を支配するべきだという根拠にはならない、ということであろう。この宣言が出された事実から、批判特輯號の世界観―皇国日本を主軸とするグローバル主義―は、『みくに』だけではなく、当時の日本に広く行き渡っていたということがわかる。さもなければ戦後、わざわざ天皇自らがその皇国的グローバル主義を架空なるものなどと宣言する必要もないだろう。おそらく、このように日本で広く共有されていた世界観に『みくに』も影響されたのであろうと考えられる。今泉源吉をはじめとする批判特輯號執筆者らが熱い思いで語った皇国的グローバル主義は、昭和天皇自身によって否定されることとなった。彼らは、この宣言を戦後どのように受け止めたのだろうか。『みくに』は 1943 年で終了しているので、残念ながら、『みくに』という立ち位置での、批判特輯號執筆者らの戦後の思いを確認することは難しい。

（４）批判特輯號が思い描くのとはかけ離れた現実の戦（いくさ）

昭和初期、批判特輯號執筆者らは、『古事記』以来の日本的なる精神に則り聖戦として第二次世界大戦を戦い抜く、としていたようである。しかしながら、現実の戦争は神話の八岐大蛇退治とは異なり、善悪二元論で割り切れるものではない。また、全ての国が、公明正大な仕合（しあ）いの精神で戦に挑むわけでもないだろう。第二次世界大戦の実際の戦場は、今泉らが思い描くのとはかけ離れた過酷で卑怯なるものであったに違いない。その意味でも批判特輯號執筆者らが、過酷な戦場に若者を送る言葉を掲載し続けたのは遺憾である。しかも、戦場で水漬く屍となった若者は、『みくに』執筆者らが願ったのとは異なり、結局は大君（おおきみ）のために散ったわけでもなさそうなのである。第二次世界大戦前中、日本は天皇制の

軍国主義の下大戦へと走ったか、あるいは、皇国日本は大東亜解放のために白人国家と戦ったか、を論点として、しばしば世論の注目を集める論議になるが[30]、しかしながら、これらとは異なる視点で歴史的解釈をしている研究家もいるので、ここで言及したい。

一人目は、三田村武夫である。三田村によれば、第二次世界大戦へと日本を導いたのは天皇や軍人ではなく共産主義者である。すなわち、「天皇の下に国家至上主義と一君万民の平等主義に立脚した」[31]青年将校らの夢見た革命思想を共産主義者らが利用し、共産主義国家実現のための敗戦革命（敗戦が引き金となり革命が起こる）へと導いたというのである。また、一部のいわゆる軍閥政治軍人たちも、大戦に「『勝てる』と信じ『天皇革命』が可能だと信じてゐるところに利用価値があつた」[32]と判断されたため、彼らは敗戦革命に協力させられたのだ、という。

二人目は林千勝である。林によれば、第二次世界大戦への先導者の一人が近衛文麿であり、彼が共産主義者たちを利用したのだという。しかしながら、近衛にとっては日本に「敗戦革命によって共産主義政権が樹立される可能性については当初からマイナーシナリオ」[33]であり、それどころか「共産主義者が仕組んだ戦争への道を、近衛という人間は臆面もなく自分に都合よく加工して日本統治の最高責任者マッカーサーに語」[34]り、また「敗戦後のみずからの身の保全と覇権獲得にむけて、まず昭和天皇を戦争責任によって退位させること」[35]を狙っていたのではないか、という。更に、その近衛文麿も実は外国勢力に使われたピエロだったのだ、と林は論じている[36]。すなわち、日本を大戦に引き入れた張本人は結局外国勢力であるというのである[37]。三田村や林の考察をまとめると、日本を大戦に巻き込みたい外国勢力が覇権を狙う日本の近衛文麿に接近し、その近衛は（自分も使われているとは気づかず）共産主義者を利用し（あるいは利用したつもりになっており）、その共産主義者は勝利を疑わなかった青年将校や軍閥政治軍人の一部をして日本を敗戦確実な戦争へと導かせしめた、となる。

第二次世界大戦ほど大きな戦争の責任を、誰に課すのかは簡単には答えは出ないであろうが、もし三田村や林の考察が歴史の真相ならば、戦に勝つと信じ、大君のために水漬く屍となれ、と熱く語っていた『みくに』批判特輯號執筆者らも知らず知らずのうちに、自ら警戒していたはずの敵、共産主義者や外国勢力そのものにより使われ、その敵を利するために若者を戦場へと送ったことになる。第二次世界大戦は多くの死者を出しており、敵のプランに嵌められてそれと気づかず雄々しく戦いを挑んでいる批判特輯號執筆者らを単に滑稽だと笑うことも憚れる。大戦当時の当事者よりも多くの情報を持つ現在の我々が、過去を遡って彼らを裁くことには慎重であるべきである。また、三田村や林の考察の妥当性も今後更に検討されるべきであろう。しかしながら、いずれにせよ今の我々には今の課題があり、まずは自らが過ちへと陥らないよう自己内省を怠らないことが肝要であるのは間違いないであろう。

Ⅳ. 21 世紀における反ユダヤ主義と反グローバル主義―結語に変えて―

第二次世界大戦後、清水二郎[38]が記すところによると、「後年、今泉源吉が、『みくに』運動に傾斜し、太平洋戦争中に賀川の思想的な立場に苦しみをかけたことを深く悔い、終戦時、病をおして賀川を訪い率直に謝罪を申し出た」[39]のだという。清水によれば、二人は和解したようだが[40]、両者和解の着地点はどこであったのだろうか。今泉がかつての『み

くに』で語った皇国への信仰に似た愛国心を悔いて、グローバル的思想の持主である賀川に歩み寄ったのか。それとも、第二次世界大戦末期、日本の都市が絨毯爆撃を受けるに及んで、賀川豊彦も反米英になり[41]、また戦後、賀川は「主権は永遠に道徳卽政治を把握し給ふ皇室を中心とせねばならぬ」[42]としていたというから[43]、今泉の皇国に対する思いはそのままに、賀川が持つ尊皇の気持ちに今泉が気づいて両者和解することができたのであろうか。あるいは、実際の世界大戦は、今泉が想像していたような、日本の伝統である仕合いのような美学とはかけ離れており、また、キリスト教国による戦いとは思えない残虐さを賀川に見せつけ、二人とも、現実の前に理想が敗れ去った面持ちになったという点では同じで、そこに歩み寄りの起点を見出したのだろうか。

両者ともこの件について日記などは残していないようなので、和解の真相は想像するしかないが、ここでは昭和初期、皇室や天皇については何らかの特別な思いを抱いていたのは、当時の日本人であれば当たり前のことであったのではないかという点のみを指摘しておきたい。例えば、尾崎秀實（ほつみ）という人物はスパイ容疑でリヒャルト・ゾルゲと共に逮捕・死刑に処せられた共産主義者であるが―近衛文麿のブレーンでもあった彼が共産主義者でスパイとは衝撃的なことなのだが―、彼でさえ、制度としての天皇制には反対でも、一家族として皇室が残ることには異論はなかったと自ら記しているぐらいなのである[44]・[45]。

このような時代的背景があったからこそ、キリスト教から決別した『みくに』だけでなく当時の日本のキリスト教徒は「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」（1944 年 3 月 26 日発出）の中でも「万邦無比なる我が日本の国体」「我が国体の尊厳無比なる基礎に立ち、天業翼賛の皇道倫理を身に体したる日本人基督者」というような表現を用いることができたのではないかと思われる[46]。

世界宗教であるキリスト教が日本に根付くには、礼拝堂を畳にしたり、聖餐式の器を日本製にしたり、礼拝堂に飾る花を桜にしたりなど表面的な日本化では不十分である。その理由の一つには、マーク・R・マリンズも指摘しているように、日本には習合の伝統があり[47]、もう一つは、本論文第Ⅱ章でも触れたように、皇室との関係があるためである。天皇を人間の元首として尊敬しエホバを神として信仰するのであれば、両者折り合いをつけることも可能である（両立）。しかしながら、天皇を人としてではなく宗教的次元での存在であるとし、キリスト教をクリスマスパーティなどイベント的なものを超えて我々の魂を支える宗教として日本で伝道するとなると、キリスト教では複数の神を信仰することはできないことになっているので、天皇かエホバか、の問いに向き合わざるをえなくなってくる。そこで、キリスト教伝道に際しては、仏教に倣ってキリスト教を日本化する（混淆）[48]、あるいは、加藤（2020）で紹介したように、皇室の信仰は実はキリスト教に近いもので、日本の伝統も元を辿ればキリスト教的なもの（あるいはユダヤ的なもの）なのだと＜発見＞し、どちらかを選ぶという課題から求信者を解放する、のようなアプローチも提案されてくるのである[49]。一方、今泉らの『みくに』のように、キリスト教から決別することもあり得よう。明治維新以後令和の今になっても日本において世界宗教であるキリスト教徒が少数のままである実情は、言い換えれば、日本的なるもの―習合の伝統や皇室の存在―がいかに深く厚いものであるかを表しているとも言える。

このような厚みを持つ日本的なるものは、グローバル化の波を遮る堤となって立ち現れ、この＜日本的なるもの＞対＜グローバル主義＞という事態は 21 世紀の日本でも消えてい

ない。更にグローバル主義推進勢力の主力はユダヤであるという考え方も無くなってはいない。昭和初期反ユダヤの先頭に立ち、国民から圧倒的人気を得ていたという四王天延孝の著作『猶太の思想及運動＜上・下＞』が、2016 年になって、ともはつよし社から復刻出版された。同著表紙には、ここで描かれているユダヤ人は「ユダヤを仮装する国際金融業者のことであろう」と書かれているが、このような書籍が復刻されること自体、日本におけるユダヤ人問題論議の関心の高さと広がりを感じさせる。

2021 年には林千勝著『「ザ・ロスチャイルド」大英帝国を乗っ取り世界を支配した一族の物語』が出版された[50]。日本を含む各国に、グローバルに事業展開するロスチャイルド家がどのようにかかわってきたのかを歴史上の出来事を基に記し、写真や表などを多用して一般読者にも読みやすく書かれている。この著作が描き出す基本的世界観は『みくに』批判特輯號と似ている。すなわち、グローバルユダヤ勢力に日本はいかに対処するべきなのかが、同著が読者に投げかけている問いなのである。

『天皇を戴くこの国のあり方を問う新国体論 ―精神再武装のすすめ』[51]などの著作がある馬淵睦夫はロシア・ウクライナ紛争勃発後、元駐ウクライナ兼モルドバ大使であることから近年著作や YouTube などでの発言が一般人の中で注目を集めている。彼も、日本の国体を圧迫するグローバル主義には反対の立場を示し、はっきりと「現在の国際的な仕組みの多くが実はユダヤ思想の具体化である」[52]と明言している。

ユダヤという言葉は使っていないが、グローバルに影響力を持つウォール街の動きに日本はどのように対応するべきか、という視点で著作を重ねているのが堤未果である。ウォール街を国際金融資本と言い換えれば、国際金融資本と関わりの強いのは国際ユダヤ人であるから、堤の世界観もまた、批判特輯號のそれに近づく。

ただし、今泉らと異なり、林・馬淵・堤にはヒトラーやローゼンベルグへのシンパシーはないし、偽書『シオン賢者の議定書』を著作の中で扱うこともない。ユダヤ人迫害を主導するなどということや『みくに』批判特輯號で主張されたような武力対決への誘いもない。例えば、馬淵がグローバル主義に立ち向かう方策として提案しているのは、民族主義と普遍主義の両立である[53]。馬淵によれば、このような両立が認められているのは現在ユダヤ人だけであるが、これを他民族にも認めることができれば紛争は回避されるだろうという[54]。すなわち、ユダヤ的だとされるグローバル主義（ユダヤ人には民族主義も許されている）に日本が立ち向かう場合、構図としては、＜ユダヤ的普遍主義＞対＜日本民族主義＞ではなく、＜ユダヤ民族主義と普遍主義の両立＞と＜日本民族主義と普遍主義の両立＞のとのバランスだ、というのである。

堤は、ウォール街が最も恐れているものは日本のお互いさまの精神であり、それを世界に広めることがウォール街の波を食い止める解決策の一つとして記している[55]。

林も YouTube などで活発に発言をしているが、日本文化チャンネル桜代表取締役社長でもある水島総との対談の中で、ユダヤ化したアメリカにおけるグローバル主義と戦うアメリカ第一主義を学ぶと共に、それを超えなければならない、すなわち、ユダヤ的グローバル主義とアメリカ第一主義を止揚しなければならない、それが可能で解決のための思想哲学を提示できる勢力は和を重んじ八紘一宇の伝統を持つ日本しかなく、この思想哲学を世界に発信できれば、日本は自国だけではなく世界を救うことができる、としている[56]。

すると、彼らはその著作や発言の中で、一見、＜国家主義＞対＜グローバル主義＞（あ

るいは＜民族主義＞対＜普遍主義＞）が戦っているという世界観を描いているようであるけれども、実際には、グローバル主義同士―誰が主導しどの宗教・伝統・文化・習慣で世界を覆うかが異なるが―が対峙している、という構図に近似しているようにも見えてくる。

彼らは、『みくに』を生み出した昭和初期日本のように、武力闘争に訴えかけているわけではない。その点で彼らは慎重である。そのような慎重さに注目せず、著作の中のグローバル主義への警戒感、そして日本からの発信の箇所のみを切り出し、かつての日本が歩んだ如く、武力による闘争への道を進む者が彼らの読者の中から出てくることがないよう祈るばかりだ。武力闘争は生命の損失を伴い、民族が弱体化しあるいは滅べば民族の伝統も消滅し、民族主義と普遍主義の両立でさえも不可能になってしまう。地球全体が戦火に巻き込まれれば、人類そのものの存在が危うい。

大航海時代以降、人の世界規模での往来が活発になり、また、インターネット環境の充実が進む 21 世紀の現在では、かつて宗教的次元に留まっていた世界の統一―すなわち、世界全体を支配するのは神的存在、キリスト教の場合は再臨したイエス・キリスト、のような―は、人間によって実現可能な領域に入り込んでいるように見える。そのような中、政治・経済・軍事の各界で、ある一つのイデオロギーを以て世界統一を目指し、実行に移そうとする者がいる場合、それはどのような事態をもたらすのであろうか。グローバル主義者と一口に言っても、皆同じイデオロギーの持主ではないだろう。武力衝突の連続であった第二次世界大戦では、多くの犠牲者が出た。令和の現在、同様の対立が起こらないという保証はない。過去を幾度も訪れ、そこから弛まず学び続けることが、平和の維持のための一つの鍵となるだろう。

参考文献・注

1) 加藤知子：日本的キリスト教についての一考察―今泉源吉『みくに』における反ユダヤ主義から、日本キリスト教界が受けた弾圧を読み解く―．星城大学 研究紀要 22：21 - 36，2022.
2) 『みくに』や主筆今泉源吉についての概要は，大島純男：今泉源吉と「みくに」運動．金城学院大学論集 173：17-41，1997，大島純男：共助会と「みくに」運動．共助二・三月号：13-36，2000，小室尚子：「みくに運動」におけるキリスト教土着化の問題．神学 56：221-249，1994，藤巻孝之：みくに運動の軌跡―一つの証言―付 山梨公会の場合．キリスト教史談会パンフレット⓱，1983、藤巻孝之「みくに」運動の軌跡．共助二・三月号：37-45，2000 などが詳しい．
3) 加山久夫：戦時下の賀川豊彦―「みくに」運動による賀川批判を中心として．明治学院大学キリスト教研究所紀要 37：93-130，2005.
4) 「みやざわ」の表記は「宮沢」「宮澤」の両者が見られるが，本論文では，本文・参考文献・注ともに、「宮澤」で統一した．
5) 宮澤正典：ユダヤ人論考 増補．新泉社，1982，122.
6) 参考文献 5)書，122.
7) 宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1877-1988．新泉社，1990.
8) 宮澤正典編：日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録 1989-2004．昭和堂，2005.
9) 宮澤正典：近代日本のユダヤ論議．思文閣出版，2015.
10) 参考文献 5)書，186.
11) 参考文献 5)書，219，参考文献 7)書，16.
12) 参考文献 5)書，219-220，参考文献 7)書，p.17.
13) 参考文献 5)書，219，参考文献 7)書，17.
14) 参考文献 5)書，186.
15) 同，187.
16) 参考文献 5)書，238、参考文献 7)書，43.
17) 第二次世界大戦後の文献も「新目録」には含まれているが，表 1 では 1945 年までのものだけを記している．また，「新目録」後にも新たに発見されたものは，参考文献 8)書，参考文献 9)書に付記されているが，表 1 には含めず，本注に記すこととする．これらの文献にも，『みくに』への更なる言及は見当たらない．

参考文献 8)書＝宮澤編（2005）に付記された文献数は次のとおりである．

年	文献数	年	文献数	年	文献数	年	文献数
1897	1	1919	1	1929	3	1938	19
1898	1	1920	2	1930	2	1939	28
1903	1	1921	1	1931	1	1940	30
1906	2	1922	2	1932	4	1941	23
1908	1	1923	1	1933	9	1942	3
1910	1	1925	2	1934	6	1943	9
1912	3	1926	2	1935	8	1944	15
1914	1	1927	1	1936	8	***	***
1918	3	1928	3	1937	3	***	***

参考文献 9)書＝宮澤（2015）に付記された文献数は次のとおりである．

年	文献数	年	文献数	年	文献数	年	文献数
1943	1	***	***	***	***	***	***

18) 参考文献 7)書，8.
19) 「第二特輯號」の表紙に第十號とあるが，これは第十一號の誤りであろう．参考文

献・注欄では，これら三号を掲載し，個々の記事については表２を参照することとした．例えば、(表２④、40）なら，表２④の松野重正の記事中 40 ページを指す．批判特輯號の文献情報を次のとおり示す．
今泉源吉ら：みくに 賀川豊彦氏の思想批判特輯號 第八巻第十號，1942a.
今泉源吉ら：みくに 賀川豊彦氏の思想批判特輯號 第八巻第十一號，1942b.
今泉源吉ら：みくに 賀川豊彦氏の思想批判特輯號 第八巻第十二號，1942c.

20）参考文献 5)書，11-17．第一期は 1918～19 年から十余年間（第一次世界大戦末期からナチス勃興期)，第三期は，アウシュヴィッツ強制収容所から 1960 年のアイヒマン逮捕・裁判・処刑まで，第四期は、1948 年のイスラエル建国後のイスラエル・アラブ対立の時期となっている．参考文献 7)書，1 と 8)書，ii では，第１期・1921～1932 年，第２期・1933～1945 年，第３期・1950～1967 年，第４期・1967～現在，としている．参考文献 9)書，11-27 では，第一期は大正中期～昭和初期，第二期は昭和戦時下，第三期は，第二次世界大戦後，第四期は第三次中東戦争後，となっている．いずれにせよ，『みくに』は第 2 期にあたる．

21）黒川知文：ユダヤ人迫害史―繁栄と迫害とメシア運動．教文館，1997，277-278.

22）この点では，参考文献 1)書でも言及した．賀川はユダヤ民族援助論を唱えていた人物でもある（賀川豊彦：放浪的ユダヤ民族の運命．改造 11 月号，16-26，1934).

23）賀川も批判特輯號筆者らもグローバル主義という表現は使っていないが，文脈から国境のないグローバル主義についての議論であると判断できるため，本論文ではグローバル主義（国境・民族の垣根を飛び越えて活躍するコスモポリタンとは異なる）と記すこととする．

24）「ヨーロッパよさよなら」は賀川豊彦：雲水遍路．改造社，1926，388-396 に収録．本論文に引用されている該当箇所は同著 394 ページ．

25）賀川豊彦：イエスと人類愛の内容．警醒社書店，1923.

26）共同訳聖書実行委員会：聖書 新共同訳．日本聖書協会，1990.

27）これらはキリスト教国であるが，それ以外では清が挙げられている．

28）「猛獣」とは、ここではアメリカとロシヤ（ソ連）を指す．

29）「終戦翌年頭ニ於ケル詔書」として，文部科学省のサイトなどでも閲覧できる．(入手先＜https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317942.htm＞，(参照 2022-10-18).

30）例えば当時防衛省航空幕僚長であった田母神俊雄による「日本は侵略国家であったのか」などが論議を呼んだのは記憶に新しい．同文献は https://ajrf.jp/ronbun/pdf/vol01.pdf（参照 2022-12-9）で入手可能である．

31）三田村武夫：大東亜戦争とスターリンの謀略―戦争と共産主義―＜自由選書＞．自由社，1987，201.

32）参考文献 31)書，201.

33）林千勝：近衛文麿 野望と挫折．ワック，2017，298.

34）参考文献 33)書，308.

35）参考文献 33)書，279.

36）林千勝：日米戦争を策謀したのは誰だ！―ロックフェラー、ルーズベルト、近衛文麿そしてフーバーは―．ワック，2019.

37）参考文献 36）書，376-377 にまとめ．

38）大島純男牧師によれば，清水二郎の仲人は今泉源吉であるという．

39）清水二郎：森明．日本基督教団出版局，1975，170.

40）参考文献 39）書，171.

41）参考文献 3）書，114-126.

42）賀川豊彦：デモクラシー―民主主義とは何か―．時事通信社，1945，30.

43）この点は，倉橋 克人：戦後キリスト教の道標 ― 賀川豊彦と戦後天皇制―．キリスト教社会問題研究 44：67-104，1995 でも言及されている（該当ページは 84)．なお，注 22)の賀川（1934）と参考文献 42）書は，賀川豊彦記念松沢資料館で閲覧させていただいた．

44）尾崎秀美：ゾルゲ事件上申書．岩波文庫，2003，207-212.
45）参考文献 31）書にも尾崎秀實の手記抜粋が収録されている．尾崎の天皇制についての箇所は 230-233 ページ．これはもともと，逮捕後第二十七回検事訊問調書に書き留められた尾崎の，日本国体に対する考えである．参考文献 44）書と内容は同じ．
46）日本基督教団：日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰．1944．日本基督教団史資料集第２編戦時下の日本基督教団（1941～1945 年）．日本基督教団出版局，316-117 に収録．
47）マーク・R・マリンズ（高崎恵訳）：メイド・イン・ジャパンのキリスト教．トランスビュー，2005，222.
48）笠原芳光：「日本的キリスト教」批判．キリスト教社会問題研究 22：114-139，1974 では，日本的キリスト教の類型として，混淆、両立、触発が挙げられている．『みくに』はもともと，混淆型日本的キリスト教として出発したと判断できる．
49）加藤知子：日本におけるキリスト教伝道に関する一考察―清里の父ポール・ラッシュの伝道成果をヒントとして―．星城大学 研究紀要 20：1-16，2020.
50）林千勝：「ザ・ロスチャイルド」大英帝国を乗っ取り世界を支配した一族の物語．株式会社経営科学出版，2021.
51）2019 年ビジネス社より出版。
52）馬淵睦夫：ウクライナ紛争―歴史は繰り返す―戦争と革命を仕組んだのは誰だ．ワック BUNKO，2022，228.
53）参考文献 52）書，226-229.
54）同，226-227.
55）堤未果：株式会社アメリカの日本解体計画 「お金」と「人事」で世界が見える．株式会社経営科学出版，2021，150-159.
56）【今、世界はどうなっている？】林千勝×水島総 第 19 回．米中間選挙が時代の裂け目に？キャンセルカルチャー工作の猖獗とアメリカ内戦革命．チャンネル桜・別館，2022 年 10 月 15 日公開，35:00-46:10，入手先＜https://www.youtube.com/watch?v=nioVT_7NHR8&t=736s＞，（参照 2022-10-19）.